

孟蘭盆会を重要視すべきであると考ええる。

北周武帝の廃仏について

若 麻 績 修

支那に於て隋が国土を統一し、引き続いて唐が強大な国家を形成した頃（五八一―七五〇）、印度では見る事の出来ない形式と内容を持った仏教、即ち天台、華嚴、念仏、禪などの様な所謂支那独自の仏教がぞくぞく大成されて、支那に於ける仏教の黄金時代を築いたのである。

常盤大定博士の著を見るに、支那に於ける仏教の歴史的発展について隋唐代（元宗まで）を支那仏教の建設

時代、南北朝代、北周までを（四〇〇―五八〇）、研究時代として展開しておられる様に、隋唐の如き大発展の源泉は政治、思想、軍事共幾多の変遷を重ね、世状が非常ににぎやかであつた南北朝代に発するものであり、その直接的契機となつたのは、北周武帝（五六一―五七八）

に依る宗教全廃に発するものと考えられるのである。

塚本善隆博士は著「北周の廃仏」に於て、全十章にわたつてその廃仏の経過をくわしく論述されておられるが、それを要約して、周武をして廃仏に至らしめた根本原因は、一、周礼復古の標榜と強い中華優越の意識に依る外教への輕蔑視乃至拒否の意識感情による廢毀。二、富国強兵（北齊討伐）の爲の廢毀。三、仏教の真をあやまりゆがめ、墮落している現在教団を廢し、具体的現實に即した真仏教を具現し顕現する爲の廢毀。であると言われていることがわかれるのである。

私は本論が北周の廢仏について最も事實を教えるものと受け取り、準拠してさらにその前後に於ける廢仏、北魏太武帝（四二四―四五二）、唐武宗（八四三―八四六）、後周世宗（九五四―九五九）、所謂「三武」の宗教の論拠と比較する事に依つて、北周廢仏の特異性を求めつゝ、支那に於ける仏教受容の歴史的変遷の形態を知ろうとするものである。

一例として、前後の廢仏の詔と北周の廢仏の詔を對比

してゐるに、北魏太武帝の廢仏に於ては、太平真君五年（四四四）正月、詔して「彼沙門者、假西戒虛誕、妄生妖、非所以一齊政化、布淳德於天下也。」（魏書紀老

志三十五）として、太平真君七年（四四六）三月、廢仏の詔に「昔、後漢荒帝（明帝）、信惑邪偽、妄反睡夢、

事胡妖鬼（仏）、以乱天常。……自今以後、敢有事胡神、及造形像泥人銅人者、門誅。」（同三十六）と。また唐

武宗の廢仏に於ては、会昌五年（八五四）八月、詔して

「朕聞、三代已前、未嘗言仏、漢魏之後像（仏）教寢興、

是由季時伝此異俗、因緣染習、蔓衍滋多、以至於蠹耗國風、

而漸不覺、誘惑人意而衆迷泊、……違君親於師資之際、

違配偶於戒律之間、壞法害人無逾此道。」（旧唐書卷十八

本紀上（中華書局影行）六頁）と言わしめている。そして北周武帝の廢仏についても、建德二年（五七三）十二

月「集郡臣及沙門道士等。帝升高座、并积三教先後。以

儒教為先、道教為次、仏教為後。」（周書卷五十二）

とあり、建德三年五月には「初斷仏道二教、經像悉毀、

罷沙門道士、並令還民、并禁諸淫祀、礼典不載者、尽除

之。」（同二十四頁）と、さらに「朕非五胡心無敬事。

既非正教所以廢之。」（広弘明集卷十、大正蔵五二卷一

五四頁）と言わしめているのである。

之によつて共通に認められるところは、既知の如く、

強い中華意識の国家体制より来る外来仏教に対する中国固有の教学や信仰の抗争、時に道教との衝突、富国強兵策とそれを防害する思想の混乱、社会的、経済的な問題としてとらえる事には疑問のないところである。

然しその相異なる点をさぐるならば、周武前後の廢仏

が胡教たる所以をもつて「偽教」ときめつけられ、帝の道教過信に依る仏教のみの淘汰であり、その提唱者は道教信者によつて出されているのを察するに、北周の廢仏

に於ては先述の如く、道仏二教団とも整理している事、

また提唱者は仏教側から出た事、さらに實際は道教を重

んじたとしても帝なりに仏教の真を認め、道仏二教の儒

教への真一掃一性を研讀せしめる為の「通道觀」なるも

のを設置している等の点に認められるのである。

之について教団僧侶の腐敗墮落という点では「三武一

宗」いづれにも認められるところである。北周に於ても、北魏の専制君主権を背景として生みだされた僧官制の発達に依る仏教教団の未曾有の増大は、北周までも続き、又中央に「周国三藏」、州に「州三藏」をぞくぞく任官させ、それに伴つて多くの仏事が建立されたのであるが、それ等は何れも中央政界と地理的に或は血族的に親縁をもつものばかりであり、朝廷と結びついて發展する教団に於ける榮達は、中央僧官寺院のみに与えられる。即ち長安に通じ官権に通ずる寺院僧侶のみに集中された教団共有の福利の甚しい偏在を招致する事を示すものであり、それを裏書きするかの如く、事もあろうに蜀の還俗僧たる衛元嵩が廢仏の指導者となつて「嵩請造平延大寺、容貯四海万姓。……夫平延寺者。無選道俗罔親疎。愛潤黎元等無持毀。以城隍爲寺塔。即周主是如來。」（弘明集卷七、大正藏五二卷一三二頁上）と、今の不公平な寺院僧侶を廢して、もつと民を利し、國を益する仏教を行ふべきであり、それは周主が如來となつて、城を大寺

として、民を僧とすることにあるのだと十五カ条の上書をせしめていたのである。がともかく之は前後の廢仏が道士により指導されているのに反し、全く異例であり、さらに是如く言わしめているのは、例え嵩の榮達への策略が感じとられるとはいへ、私は教団の中からこの様な人物を出した事自体、すでにその腐敗、墮落、教理面の行きづまりを如実に示しているものと取るのである。

こうして行われた教団の全廢について、周武が言うのに、「帝王即是如來。宣停丈六（仏）。王公即是菩薩。省事文殊。青年可爲上座。不用寶頭。仁惠真爲檀度。豈飯棄國。……以民爲子。可謂大慈。四海爲家。即同法界。安樂百姓。寧殊拔苦。……即事而言何処非道。」（弘明集卷十、大正藏五二卷一五五頁上）（周高祖巡 除於佛法有前僧任道林上表開法事）と言う如く、衛元嵩の上書と意を同じくして、仏教そのものを廢するのでなく、墮落した現在教団を全廢し、具體的現實に即した真仏教を顯現するのであつてむしろ興仏を旨とするのであると言っているのである。

強化せしめんという点に、むしろ比重がかかるものと考
えるのである。

然し是の如き真仏教の顕現というのは、宗教信仰を失
つた民心の不平不満の打開策とも考えられるが、なお北
支那を二分する一方の勢力北齊との緊張關係にあつて富
國強兵を旨とする周武に於ては、あくまで國家の存立が
主眼であり、仏教は従であり、為國行道の思想、皇帝即
如來の下での真仏教と言うのである事が理解出来るので
あつて、「歴代三寶記」に言う「欲齊三教」（卷十一、
大正藏四九卷一〇一頁中）との談論も、すべて國家の大
本たる儒教古典に齊しくせん事を求めたのであり、また
仏道の枝葉を廢しその根本を保存する為に設立すると宣
言した「通道觀」の内容も「至道は一を以て貫く可き
なり」（広弘明集卷十大正藏五二卷一五三頁上）として
「衣冠笏履」を著けしめて通道觀學士としている事によ
つても、それを理解出来るのである。

斯くして私は今までの論述に於て、前後の廢仏が帝の
道教過信による外教卑下、仏教への怨憎が重きをなすも
のととらえ、比して周武の廢仏は、一貫した富國強兵策
の下に、腐敗墮落した現在教団を廢して、皇帝權をより